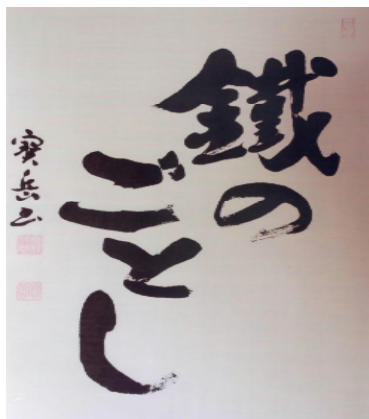


【平成23年 5月 地域警察官特別派遣部隊 男性警察官（45歳）】

「今後の教訓として」



この度、地域警察部隊特別派遣として秋田県警からパトカー3台6名、大阪府警から14台30名、合計17台36名で岩手県釜石市と大槌町内の避難所の警戒警ら、各種事案対応などの活動をしてまいりましたので、被災地の様子などを交えて報告いたします。

まず、岩手県釜石警察署は、署長以下署員78名、3交番7駐在所をかかえ岩手県内17警察署のなかでは中規模警察署で、比較的新しい建物でしたが、津波により2階まで完全に水没し、機能が完全に消滅してしまい、近くの小佐野交番へ警察署機能を移して業務にあたっていました。

釜石警察署では、今回の震災で4人の警察官とその家族など合計11人が亡くなっており、ほとんどが駐在所員とその家族であったそうです。

同僚を亡くし、さらに家族が被災している中で業務に当たっている署員も多く複雑な思いもしましたが、警察官として与えられた仕事を黙々とこなす姿を見ていると、署訓にある「鐵のごとし」という署員の士気の高さを感じました。

釜石市は、新日鐵釜石を代表とする製鉄業及び漁業が盛んな、海からすぐに急峻な山々が背後にそびえる人口4万人弱の町です。また、隣接する大槌町は大槌川沿いに広がる人口1万5000人強の小さな港町であり、釜石市とは違い付近は砂浜の多い地形で、特に被害が多かったのはこの大槌町でありました。

新聞・テレビでも報道されておりますが、屋外で災害対策会議中に津波被害を受け、町長が亡くなったことで記憶にある方もいると思います。

大槌町は役場の建物が消滅しているため「大槌中央公民館」に役場機能を移し、災害対策本部、臨時交番、避難所としていました。

高台から大槌町全体を望むと、町全体に木片が散らばって茶色に見え、町全体が瓦礫の山のような光景が広がっていました。

木造建築物は粉々になり、電柱がねじ曲げられ信号機が倒壊、二階建ての家が逆さま、大型の観光船が2階建ての家の屋根に乗り上げ、鉄道の鉄橋及び線路が橋脚だけを残して消え去り、橋の欄干やガードパイプが同じ方向に倒れているなど極めて無残な状態で、いかに津波が大きく、ものすごいスピードと威力で町を襲ったのかがうかがえる状況でした。

また、津波でヘドロが巻き上げられた影響で、道路及び建物が泥まみれになり、ヘドロ様の腐敗臭が辺りにたちこめていました。さらに船やタンクから漏れ出した油が原因で火災も発生し、実に地区の3分の1が焼失しており、焼けこげた臭いや死臭にも似たような異様な臭いがたちこめていました。テレビや新聞では伝わらない、予想をはるかに超えた想像を絶する状況でした。

現地の今までの津波対策については、「備えあれば憂い無し」の言葉どおり、三陸沿岸は度重なる津波被害を教訓とし、堅牢な防潮水門を築いていましたが、今回の津波では、

防潮水門も大津波に飲み込まれ甚大な人的被害に見舞われました。

リアス式特有の異常に高さを増した津波や、堤防からあふれ出した津波が待避中の車列を一気に飲み込むなどの想定外の被害がある一方で、避難せずに津波に押し流されたり、大丈夫だと過信して家に戻って被災したケースなど、津波を過小評価して被害にあった方も多かったと聞いています。

釜石市の小中学生には、昔から「津波てんでんこ」という言葉が言い伝えられているそうで、これは、「津波がくるときは、家族の事は気にせず、てんでんバラバラになって逃げてでも自分の命を自分で守りなさい」という、この地方での昔からの教えだったそうです。実際、釜石市内の小中学生約2900人のうち死者、行方不明者は5人であったと聞いていますが、これは過去の教訓を生かし、避難を優先した結果だということでした。

そして、釜石市の小さな漁港には高さ12.8メートルの頑強な防潮堤があります。その脇には竣工記念の碑があり、防潮堤を自慢する言葉とともに青地でひときわ大きく「津波への最大の防御は、避難である」と刻まれていました。

まさに防潮堤に頼るのではなく、まずは避難することが津波から命を守るために必要であることを教訓とした言葉ですが、現実すぐに高い場所に避難した人は助かり、車両で移動した人の多くが命を失ったのです。

今でも行方不明者の捜索活動及び復興作業のため、警察をはじめ自衛隊・消防・各ライフライン業者が懸命に作業を続けておりますが、それに混じって、険しい表情で行方不明者を探す人、自衛隊や警察・消防部隊を自分の家のあった場所で待つ人などが早朝から町にあふれています。

私たち応援部隊の任務は、各避難所を警らし、被災者の要望や意見を取り入れ、警察業務に反映させることでしたが、実は一番の任務が、家屋などに残された金庫や現金、貴金属などの盗難防止でありました。

「金庫が盗まれた」「自動販売機が荒らされた」「貴金属が盗まれた」という届け出があとを絶たず、ある時は瓦礫の中で金庫をこじ開けようとしていた男を職務質問したところ、中学生だったという信じがたい事案もありましたが、「遺体から指輪を持って行った者がいる」「中国から窃盗団が来ている」などの風評も多くありました。ある意味、何でもありという無法地帯をうかがわせる状況下であり、警察官による警らを強化しなければ、治安悪化は避けられない状態でした。

それでも、パトカーで警らしていると、住民の方からは「赤灯を見ると守られていると実感します」「パトカーの姿をもっと見せて下さい」「秋田からわざわざ大変ですね。ありがとう」などと心温まる、暖かい言葉を掛けられました。

被災して自分の事だけでも精一杯なはずなのに、感謝の言葉を忘れない姿が、被災地での過酷な勤務の大きな励みになりました。

そして、私が釜石市で夜間の避難所警戒にあたっていた、4月9日午後11時40分ころ、宮城県沖を震源とする震度6弱の地震が発生し、一時は8メートルの津波が予想されるなど緊迫した状況になりました。

幸い大きい津波の発生はなかったのですが、地震の影響で路肩の斜面から警ら中のパトカーに落石があったりと、直ちに逃げなければ死と直面する状況下でありました。

しかし、近くの避難所から老人・子供を避難させなければならず、警察官である以上、

津波に背を向ける訳にはいかない。でも本心は逃げたい、助かりたい、津波の傷跡を見てしまったが故の恐怖、津波がくるかもしれないという恐怖を背負いながらの緊迫した勤務になりました。

もし同じような大地震が秋田で起き、大被害が発生し、家族が巻き込まれたらと考えたときに、自分は動揺せずに職務に専念し全うできるのかと不安に思いました。

今回の任務は10日間という短い期間でしたが、先に当署から派遣された地域課の主任から、当時は電気や水道も不通の状態、被災者の炊き出しを貰うわけにもいかず、冷たいレトルト食品を生のまま食べ、空腹をしのぎながら過ごしたと聞いておりました。

私が出行した際も、すべてのライフラインが復旧しておらず満足な環境ではありませんし、食事も満足に摂れない辛い状況下での過酷な勤務でした。

しかし、国家的な危機ともいえるべき今回の災害に際し、警察官の使命として機会があれば是非もう一度、現場で復興のために活動することを志願したいと思います。

そして現場の惨状をただ記憶として残すだけでなく、記録として残し、今後の教訓として生かし、この世界的津波被害を伝えていかなければならないと思いました。